

## 中国・第6回全国人口センサス調査について

童 適平（経済学博士）

アジア近代化研究所研究員・明治大学教授

4月28日に中国統計局は第6回全国人口センサス調査データの一部を公表した。全容がわかるのはこれからであるが、今回公表されただけでも、かなりの事実が判明する。そこで、以下、筆者が人口変化から考える、いくつかの主要な点について書くことにしよう。

今まで行われた5回の調査は1953年、1964年、1982年、1990年と2000年である。この調査は全国を550万以上の調査区に分け、2010年11月1日零時を調査基準時として行われた。

公表した調査データによれば、2010年11月1日の時点で中国の人口は1,339,724,852人に上った。前回の調査年である2000年からの10年間で7,390万人増加したが、年間増加率は0.57%にまで低下した。1990年から2000年までの10年間では13,000万人増加したことから考えると、産児制限（一人っ子）政策によって約5,600万人の人口減少を実現したことになると言える。

中国最大の民族である漢民族の人口は1,225,932,641人に上り、わずかながら総人口に占める比率は引き続き低下して、91.51%となった。

人口の年齢構成は大きな変化を見せた。15歳以上の人口は増加しつつあるのに対し、0歳～14歳の人口は大幅に減少し、少子高齢化が急速に進んでいることが分かる。0歳～14歳の人口は222,459,737人で、全人口に占める比率は前回調査時の22.89%から16.60%へと急速に低下した。一方、60歳以上の人口は177,648,705人に達し、総人口に占める比率は10.33%から13.26%へと上昇した。このうち、65歳以上人口は118,831,709人に上り、総人口比率も1.91ポイント上昇して、6.96%から8.87%へ高まった。15歳～59歳の人口は939,616,410人になり、2000年より約1億人増加した。これらの変化から、急速に高齢赤が進む様子が伺える。

調査公表後の記者会見で、統計局長は今後の10年間に15歳～60歳の生産人口はほぼ横ばいの状態が続くが、2013年からは緩やかな減少に転じ、2020年以降は減少が加速すると明言した。その結果、彼は労働賃金の上昇、労働集約的産業製品の価格上昇と生産方式の転換が回避できなくなるだろうと示唆した。

人口の都市化も順調に進んでいる。2010年の都市人口は66,557万人に達し、2000年より207,137,093人増加した。都市人口比率は49.68%へと高まったが、農村人口は67,415万人で、わずかながら都市人口を上回った。1990～2000年の間に、都市人口比率は毎年1ポイントずつ上昇したのに対して、2000～2010年の間は1.3ポイントの上昇となった。今後も農村から都市への人口流入は加速するものと考えられる。これだけでなく、中国では戸籍制度が実施され、戸籍の登録は簡単に移すことができないため、今度の調査で居住地と戸籍登録地が一致しない人口は261,386,075人にも達したことも判明した。その中の大半は、戸籍登録は農村でありながら、実際の居住地は都市である農民工（出稼ぎ労働者）とその家族が占めて

いる。

ところで、この農村人口の都市への流入に最近新しい動きが発生した。統計局が定期的に行っている農民工調査によれば、2010年の農民工の人数は24,223万人に達し、2009年より1,245万人増加したものの、経済が比較的発展し、農民工の主要な流入地域である東部地域の増加率は鈍化し、4.1%に止まるのに対して、中部と西部はそれぞれ7.2%と9.3%になっている。特に長江デルタ地域と珠江デルタ地域では農民工の絶対数が減少に転じたことが注目される。

短期大学卒以上の人口は119,636,790人に上り、2000年より7,393万人も大幅に増加した。この間の上昇率は160%に達した。これはこの10年間に中国の大学募集規模が急拡大したことを物語っている。

今度の人口センサス調査の詳細なデータの公表はこれからである。既に公表されたデータを見るだけでも、これから中国の社会経済の変化が窺えるかと思う。